

港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

特別展「江戸の武家屋敷—政治・生活・文化の舞台—」  
飯野藩保科家の江戸上屋敷と東京私邸の変遷岡谷 成康  
(学芸員)

**徳** 川家康が江戸に入府して以来、江戸は発展を続け、多くの大名屋敷や旗本屋敷といった武家屋敷が立ち並びました。特に江戸時代の港区域は多くの武家屋敷が集中しており、港区の歴史を語るうえで武家屋敷は外せないものと言えます。

特別展「江戸の武家屋敷—政治・生活・文化の舞台—」では港区域にあった武家屋敷を数か所とり上げますが、そのうちの一つに飯野藩保科家の江戸上屋敷があります。既刊の『歴史館だより Vol.04-2』では、館蔵資料の「飯野藩保科家文書」に含まれる同家の江戸上屋敷で作成された日記を紹介、特別展での展示を予告したところです。ここではこれと関連して、同家が港区域に所有し、当主も居住していた江戸上屋敷と東京私邸の変遷を紹介します。

同家上屋敷の所在地は、鍛冶橋内（現、千代田区丸の内二丁目周辺）・番町広小路（現、千代田区三番町周辺）・鉄砲洲（現、中央区湊三丁目）と変遷し、宝永7（1710）年から芝新堀向（現、港区麻布十番三・四丁目周辺）となります。以降は明治維新まで所在地の変更はありませんでした。江戸の大名屋敷における上屋敷とは、江戸での政務拠点である一方、江戸での藩主滞在先であり、藩主夫人が居住している等、

藩主家族の生活拠点でもありました。

しかし、江戸幕府が倒れ、明治政府が成立した後、明治2（1869）年正月13日に政府は各大名家の江戸（東京）屋敷を一度召し上げた上で、改めて下賜しました。「飯野藩保科家文書」に含まれる「従明治元戊辰年十月至明治二己巳年七月 東京日記」によれば、明治2年正月17日、同家から政府に対して屋敷地の書上を提出した上で、従来通りの屋敷地拝領を願っており、正月25日には許可が下りたとあります。

これは各大名家の江戸（東京）屋敷拝領の根拠が幕府の許可から、政府の許可へと切り替わったことを示しています。一部の大名家の屋敷地が政府に収公され、新たに政府の施設などに建て替えられることもありました。

その後、「明治四辛未年従正月至六月 諸留」によれば、明治4年6月28日、当主の保科正益は政府および東京府へ引越す旨の届書を提出しており、麻布の上屋敷から愛宕下の私邸（現、港区新橋三丁目）へ移り住みました。届書には「私儀是迄官邸（麻布の上屋敷）拝借住居仕候処、今日愛宕下私邸江引移申候」と記されています。「官邸」との記述は、明治2年正月に政府から改めて拝領したという事実を踏まえた表現となっています。

同家が明治4年6月に麻布の上屋敷から愛宕下の私邸に移り住んだ理由については判然としませんが、明治初期に展開された政府による東京の土地活用に関する政策、時勢の中にも位置付けられる動向と推測することもできます。愛宕下に移り住んだ同家は、『華族名鑑』によれば、正昭（正益の子）の代の明治33年まで居住しました。

今回の特別展では飯野藩保科家以外にも、かつて港区域に存在した武家屋敷について、その様相や風景、関係する人びとなど、さまざまな角度から見ていきます。ぜひ展示をご覧ください。



飯野藩保科家の上屋敷（東都麻布之絵図（一部）（当館蔵））



港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## 武家屋敷の中の天満宮

神谷 蘭  
(学芸員)

**港**区は、多くの寺社が集まる地域として知られています。今回は港区の寺社が描かれた錦絵のなかから珍しい作例を紹介します。

当館蔵「筑州の大宰府なる天満宮御社を江都赤坂溜池に写して鴻名不朽ほく仰く真図」(以下本図)は、歌川芳員によって万延元(1860)年に描かれました。桃色の空がやわらかな印象を与える本図には、参詣の客で賑わう境内の様子が、その配置なども詳細に描かれています。この場所、赤坂溜池(現在の赤坂二丁目付近)には福岡藩中屋敷が置かれていました。この天満宮は、屋敷の中に置かれているのです。しかし武家屋敷という空間は、藩主と家族が居住するほか政務を執る場でもあり、誰もが近づける場ではありません。ではなぜ、境内の様子を描くことができたのでしょうか。

武家屋敷の中には、さまざまな由来の神仏がおかれていましたが、文化・文政期以降、公開する動きが多くみられるようになります。赤坂の天満宮もそのうちのひとつです。岩淵令治氏によれば、福岡藩は、万延元年1月23日に太宰府天満宮を遷座し、毎月1回公開をしていました。公開日は多くの人が集ったことがうかがえます。

赤坂の天満宮が公開される以前から、丸亀藩の金毘羅社、久留米藩の水天宮は、武家屋敷の中の公開された神仏として有名でした。港区域にあったこの二社は錦絵にも数多く描かれており、その大半が初代歌川広重の手によるものです。しかし境内の様子が詳細に描かれた作例は確認できません。むしろ屋敷の外、屋敷周辺の景観が名所として描かれていることの方が多く見受けられます。その点を踏まえると、これだけ大々的に境内の様子が描かれるのは、少々異例だといえます。また天満宮を描いた作例が本図しか確認できないことも、その異例さを際立てています。

では、本図は一体どのような目的で制作されたのでしょうか。可能性として、赤坂新町三丁目の丸屋久四郎が版元であることから、赤坂という地域のネット



歌川芳員「筑州の大宰府なる天満宮御社を江都赤坂溜池に写して鴻名不朽ほく仰く真図」(当館蔵)

ワークが関係していることが考えられます。遷座・公開の年に出されたということもあり、天満宮の公開を知らせる広告として制作されたとも考えることもできるのではないかと、岩淵氏も指摘しています。またこの時期、芳員は横浜浮世絵の代表的な絵師として頭角を現していました。話題性を意識し、人気絵師に描いてほしいという藩側の意向があったのかもしれませんが。しかし管見の限りでは、ほかに丸屋から芳員が作品を出した例は確認できないため、どういった経緯で芳員に白羽の矢が立ったのかを知ることはできません。前年に丸屋は芳員の師匠、国芳の「赤沢山大相撲」を出版しているため、国芳が関わった可能性も考えられますが、検討が必要でしょう。

社殿の背後には富士山が描かれています。国許の太宰府天満宮からは決して富士山を望むことはできません。作品名には「(福岡の天満宮を)赤坂の地・溜池に写し、その偉大さを仰ぐ」という意味が込められていると考えられます。それを演出するための装置として、実際に見えたかはわかりませんが、富士山を描いて宣伝効果を狙ったのではないのでしょうか。

まだまだ謎が残る天満宮の図をご紹介します。特別展「江戸の武家屋敷—政治・生活・文化の舞台—」では、当館の所蔵する港区の武家屋敷を描いた作品を展示予定です。ご期待ください。

## 参考文献

岩淵令治「武家屋敷の神仏公開と都市社会」

『国立歴史民俗博物館研究報告』第103集、2003年

岩淵令治「堀の向こうの神仏—近世都市社会における武家屋敷」

鈴木博之ほか編『シリーズ都市・建築・歴史6 都市文化の成熟』東京大学出版会、2006年